

商法会所を設立

明治元年（一八六八）十二月十四日、栄一は東京を出発し、十九日に静岡に到着しました。翌日静岡藩庁に出向き、藩の全権大久保一翁に面談、昭武から託された慶喜への手紙、渡仏にかかわる費用の勘定書とその残金一万両余りを届け出ます。

二十三日には、宝台院で慶喜に拝謁しました。栄一が入室で控えていると、ひよろりと入って来たのが、慶喜その人でした。栄一はびくりするとともに、そのあまりの変わり様に思わず涙を漏らしつつまいます。

翌日、栄一は藩庁から呼び出され、いきなり勘定組頭に任じられます。慶喜から昭武への返書等待って水戸へ復命しようと考えていた栄一でしたが、水戸へは他の

者をやる、ここは有り難くお役をお受けするようというごことでした。栄一は、自らの職を求めて静岡にきたわけではないと、この辞令をつき返します。

その後大久保の説明により、これが、栄一の身を案じた慶喜の差配によるものであることが分かります。何かと党派の抗争の多い水戸家中のことです。昭武の信頼厚い栄一が水戸へ行けば、必ずそうした混乱に巻き込まれ、生命の危険すらあると、慶喜は案じたので、こうした事情を知った栄一は、



▲大久保一翁 (国立国会図書館ウェブサイトから転載)

自らの態度を反省することも、静岡藩財政を豊かにする一つの施策を提言します。わが国初の株式会社といわれる商法会所の設立です。

当時成立したばかりの明治政府が発行した太政官札は、財源の裏付けがないため、思うように流通しませんでした。これを打開するため、政府では、各藩の石高に応じてこの太政官札を貸し付け、その流通を図りました。年三歩の利子で十二年後に償還する決まりでした。

栄一は、この太政官札に注目し、これを基金に、地元の商人からも出資を仰ぎ、金融と物産販売を兼ねた事業を展開。その利益をもつて年々返済に充てていくつもりで、

物語の手引き

『大久保一翁』(1818 - 1888)
幕臣、政治家。早くから幕府内で頭角を現し、外国奉行など幕府の要職を務めます。また、江戸城の無血開城実現に寄与し、慶喜公とともに静岡に移ります。後に静岡県知事、東京府知事、元老院議員などを歴任しました。府知事時代には、栄一が養育院の仕事に携わるきっかけをつくりました。

『太政官札』
明治新政府は、旧幕府・各藩が発行した一切の通貨を引き継いだため、その整理安定は最大かつ緊急の課題でした。そのため、明治元年（1868年）に発行したのが太政官札でした。これは、日本初の全国に通用する紙幣で、額面は十両・五両・一両・一分・一朱の5種類ありました。

※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。

第二の人生で世界に羽ばたく



～義足のスプリンター 高桑早生さん～

ロンドンパラリンピックで、陸上競技3種目（100m・200m・走り幅跳び）に出場する高桑早生さん（20歳）。

高桑さんは、上柴東小6年の時に骨肉腫を患い、上柴中1年の時に左足ひざ下を切断しました。

知人から、こういう世界もあると連れられて行った『はばたき陸上大会』が、陸上競技への扉を開くきっかけとなりました。初めて見る色とりどりのスポーツ用義足と、生き生きと疾走する競技者の姿に、「自分も新しいことを始めてみよう」と思ったそうです。「自分の体一つで勝負する、体を目いっぱい使おう陸上をやりたい」と、成徳深谷高では陸上競技部に所属。スプリンターとしての一歩を踏み出しました。

スポーツ用義足を履くようになってからは走るのが楽しくて、陸上にのめりこんでいきました。その気持ちと比例するようになり、短期間で才能を開花させます。

【高桑さんが出場する陸上競技3種目の開催スケジュール（予定）】
100m＝6月1日（女子選・20日決勝）
走り幅跳び＝6月20日（男子選・決勝）
200m＝6月10日（男子選・6日決勝）



▲平成24年度「彩の国ふれあいピック春季大会」100mに出場した時の様子（5月20日・上尾運動公園陸上競技場）

高校2年の時に出場した初の国際大会で金メダルを獲得。慶大に進学した昨年には、国内大会で自己ベストとなる100m13秒96をマークし、日本記録までわずか0秒12と迫りました。今年の国内大会でもトップのタイムを記録するなど、数々の大会で好成績を残した結果、念願のロンドンへの道が開かれました。

「走ることを思う存分楽しみたいです。目標は入賞することですね。」制限を取り払えば、世界は広がっていく。そう教えてくれた彼女は、9月1日、ロンドンで大きく羽ばたきます。

情熱農力

季節の花を身近に



富田 博昭さん（32歳・武蔵野）

ハイビスカスやポインセチアなど、四季を彩る多種多様な鉢花を栽培している鉢花農家2代目の富田さん。「丈夫で長持ちする花を届けたい。季節ごとに旬の花を楽しんでもらいたい」と、販売状況からニーズを分析。小まめに品種を変えたり、試作の花を栽培するなどしています。「他の地域に比べ、若手の鉢花生産者は多いと思います。後継者仲間と力を合わせ、深谷の鉢花を盛り上げていきたい」と、優しく花に視線を落としました。

※富田さん（富田園芸）が栽培する鉢花は、JA花園農産物直売所で手にすることができます。

ありがとうの手紙



優秀賞
小学校高学年の部
お母さんへ

深谷小学校6年（現深谷中学校1年）大塚亮慶さん
お母さんいつも、ほくに大切なことを教えてくれて「ありがとう」。

おかあさんのおかげで、いつも友達と仲良くできたり、優しくしたりしてあげられています。

そんなお母さんに、教えてもらったのが「ごめんなさい」より「ありがとう」です。意味は「ごめんよりありがとうの方がお互いうれしいよね。」と教えてもらいました。この言葉をいつも心がけて生活しています。「お母さん、おかげでいっぱい友達が多かったよ。ありがとう!!大好きだよ。」